# 青年のアタッチメントスタイルとパートナーとの相互作用場面における自己報告及び、行動に表出された不安との関連(注1)(注2)

若　尾　良　徳

## 要　約

The purpose of this study is to investigate the relationship between self-reported attachment styles and self-reported and behavioral anxiety among Japanese young adults with intimate person in laboratory situation. The participants were eighteen pairs in intimate relationship (they were friends or romantic partners). For each pair, one of them was provoked anxiety by instruction, and then they interacted and experienced brief separation in laboratory setting. Their interactions were video-taped. Finally, they completed questionnaires involving self-report attachment styles and self-report anxiety scale. Their anxious behaviors in laboratory were rated. The result shows that attachment styles were systematically related to anxiety. Secure score was associated with low anxiety at any situation. Ambivalent score was associated with high anxiety in separation. Avoidant score was positively correlated with both self-reported and behavioral anxiety in separation and behavioral anxiety in pre-separation. These results suggest that individual differences of adult attachment are associated with a regulation of anxiety in interaction with intimate parson.

## 問　題

### アタッチメント理論の概要

Bowlby（1969，1973，1981）により提唱されたアタッチメント理論は、幼児期の母子関係を中心に研究がなされてきた。Bowlby（1969）によると、アタッチメントとは、ヒトや霊長類の子どもが主要な養育者との間に形成する情緒的な絆のことである。子どもは、養育

者との間にアタッチメントを形成すると、養育者を基点にして環境の探索を行い、不安や苦痛があるときには養育者から慰めを得ようとする。このようにアタッチメント対象を探索の拠点や不安の解消に利用することは、安全基地現象（secure base phenomenon）と呼ばれ、アタッチメントの主要な機能とされる（Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。子どもが養育者を安全基地として利用する方略の違いは、アタッチメントの個人差の指標となっている。Ainsworthたち（Ainsworth, 1967；Ainsworth et al., 1978）は、ストレンジ・シチュエーション法（以下SS法）という実験場面を用いてアタッチメントの個人差を分類している。SS法では母子の分離再会場面での子どもの反応に基づいて、子どもを安定型（secure)、回避型（avoidant)、両極型（anxious/ambivalent）の3パターンに分類する。安定型は、養育者の有効性に確信を持っており、養育者を安全基地として、うまく利用することができるタイプである。分離時には不安を示すが、再会時には積極的に養育者への接触を求め、探索にスムーズに移行できる。回避型は、養育者の有効性を期待しないため、養育者を安全基地としてうまく利用することができないタイプである。両極型は、養育者の有効性に確信を持てないため、養育者を安全基地として不十分にしか利用することができないタイプである。このように分類されたアタッチメントの個人差は、同時期、及び後の社会的適応をある程度予測することが示されている（Jacobson & Wille, 1986；Waters, Wippman, & Sroufe, 1979など)。

アタッチメントの個人差と不安

以上のように、アタッチメントの個人差は、養育者を安全基地とする際の方略の違いとして捉えられている。SS法では、新奇な場面、新奇な人物というストレッサーを導入することで、子どもに不安を生じさせ、それに対する対処方略を測定している。この場面における不安の高さから3つのタイプを見てみると次のようになる。安定型は、最も不安が低いタイプである。母親の有効性に確信を持っており、母親を安全基地としてうまく利用することができるため、不安を解消することができるのである。一方、両極型は最も不安が高いタイプである。母親の有効性に確信をもてないため、新奇な状況や母親の不在に対して、非常に大きなストレスを感じるのである。回避型は、行動上は不安があまりないように見える。しかし、生理的指標を測定すると、母親との分離中の心拍数の上昇は、他のタイプの子どもと同様に見られ（Spangler & Grossmann, 1993)、潜在的には不安を抱えていることが示されている。このようにアタッチメントの個人差は、アタッチメント人物との相互作用時における不安の程度と密接に関連している。

青年期以降のアタッチメント研究

近年、青年期以降の親密な関係をアタッチメント理論の枠組みで捉えようとする研究が増えている。Hazan & Shaver（1994）によると、恋愛関係には、アタッチメント、養育（caregiving）、生殖（sexual mating）の3つの要素が必ず含まれ、恋愛の始まりにおいては性的な要素は強いが、発展するにつれてアタッチメントと養育の要素が強くなるとしている。Hazan & Zeifman（1994）は、青年期において、アタッチメント人物が親からピア（友人や恋人）に移行することを示している。すなわち、青年期以降においては、恋愛関係、親友関係をはじめとする親密な関係がアタッチメント関係であるとされている。実際、我が国の大学生を対象とした研究においても、親よりも高い割合でピアがアタッチメント対象として選択されていた（若尾，2001）。

Hazan & Shaver（1987）によると、青年期以降にも乳幼児期と同様のアタッチメントの個人差（アタッチメントスタイル）が存在している。そのような個人差は、アタッチメントの内的作業モデル（Internal Working Models）が影響していると考えられている。Bowlby（1981）によると、内的作業モデルとは、子どもがアタッチメント対象との具体的な経験を通して形成する、アタッチメント対象への近接可能性、アタッチメント対象の情緒的応答性、及び自己がアタッチメント対象に受け入れられる価値があるかどうか、といったアタッチメント対象と自己に関する主観的な確信、表象である。内的作業モデルは、乳幼児期から青年期にかけて徐々に形成されて、固定化していくとされている。個人はこのような内的作業モデルに従って新たな対人関係を形成しようとするため、内的作業モデルは、対人関係、特に親密な関係のあり方のモデルとなるという。すなわち、親密な関係における振る舞い方は、個人の内的作業モデルを反映しているとされている。

青年期以降のアタッチメントの個人差は、主に質問紙尺度によって測定されている（たとえば、Hazan & Shaver, 1987；Collins & Read, 1990；Simpson, 1990；詫摩・戸田，1988；Brennan, Clark, & Shaver, 1998など）。これらの質問紙尺度で測定された青年期のアタッチメントスタイルは、恋愛関係の持ち方、現在の自己や他者に対する表象、過去における親との関係の知覚（Hazan & Shaver, 1987）、生育歴、自尊感情、恋愛関係（Collins & Read, 1990；Feeney & Noller, 1990；Simpson, 1990）、死にたいする恐怖（Mikulincer, Florian, & Tolmacz, 1990）、自己開示性（Mikulincer & Nachshon, 1991）など様々な個人差変数と関連していることが明らかにされている。

青年期以降のアタッチメントスタイルは、自己報告による変数の個人差だけでなく、実際のアタッチメント対象との相互作用における行動の個人差として表出されることが明らかに

なっている。Simpson, Rholes, & Nelligan (1992) は、恋愛中のカップルのうち1人を、不安を生じるような状況においた時に、彼らの自発的な相互作用と、アタッチメントスタイルがどのような関連をしているかを、サポート希求 (Support Seeking) とサポート提供 (Support Giving) という観点から調査している。恋人2人を実験室に呼び、女性にのみ〝ストレスと不安を生じるような実験を行う〟と偽の教示をして、彼女を不安な状態にした。その後2人の間に生じる相互作用を観察した。結果、secure (安定型に対応) 傾向が高い人は、avoidant (回避型に対応) 傾向が高い人に比べて、身体的接触、支持的なコメント、情緒的な支援を与える努力、情緒的な支援を求める努力が高かった。anxious (両極型に対応) に関しては、有意な結果は得られていない。この研究により、自己報告型のアタッチメント尺度と、カップル間の相互作用行動にある程度の関連があることが示された。若尾 (2004) は、Simpsonたちの手続きをさらに進めて、アタッチメントスタイルと分離再会場面におけるパートナーとの相互作用との間に関連があることを明らかにしている。若尾は、親密な関係の2人 (恋人関係、または友人関係) を不安な状態にして、自由な相互作用を行わせ、さらに短い分離再開場面を導入し、2人の相互作用を観察した。その結果、アタッチメントスタイルと行動の間に関連が見られ、それは分離再開場面に顕著に見られることが明らかになった。同様に、恋愛関係をアタッチメント関係と見なし、恋人の間で見られるやりとりをアタッチメント行動と見なしている研究がいくつか行われている (Feeney & Kirkpatrick, 1996 ; Collins, & Feeney, 2000)。

本研究の目的

本研究では、若尾 (2004) で報告されたデータの補足として、アタッチメントスタイルによる不安の違いに注目する。前述のように、アタッチメントの個人差は、不安やストレスを処理する際の方略の違いである。実際に、青年期のアタッチメントスタイルは、自己報告による不安の程度と関連があることが示されている (Hazan & Shaver, 1990)。そこで、本研究では、パートナーとの相互作用場面、分離場面を設定し、そこでの自己報告による不安と行動に表出された不安の程度に、アタッチメントスタイルによる違いが見られるかを検討する。

アタッチメントの個人差は、どのような状況でも捉えられるものではない。Simpson & Rholes (1994) によると、アタッチメントスタイルによる行動や認知の違いを見る際には、アタッチメントシステムが多かれ少なかれ活性化されるような状況を作り出すことが必要である。Bowlbyによると、乳幼児のアタッチメントを活性化する状況は、養育者との分離や

関係を脅かすような状況、疲労、けが、病気などの本人の状態、危険などの外的な状況である。Simpsonたち（1992）は、不安を生じる状況を設定することでアタッチメントシステムが活性化されていると考えている。しかしながら、Simpsonたちの研究においては、パートナーとの相互作用が常に可能な状態であったため、比較的ストレスを感じにくい状況であったと思われる。パートナーがそばに存在しているだけで、安全基地として機能することになり、ストレスを軽減することになるからである。特に、アタッチメント対象の有効性について確信が持てない両極型の人にとっては、アタッチメント対象がそばにいることは、有効性の確信を高めることになると思われる。そこで、本研究では、Simpsonたち（1992）の手続きに加え、短い分離を経験させることで、パートナーの有効性を揺るがす状況を設定する。

本研究では、教示や器具の装着によりストレスを高めた後に、パートナーとの自由な相互作用、短い分離の場面を設定し、そこでの不安の知覚、不安行動に、アタッチメントスタイルによる違いが見られるかを検討する。本研究の仮説としては、次のように考えられる。

(1) secure得点が高いほど、自己報告、行動のいずれにおいても、一貫して不安が低い。

(2) avoidant得点が高いほど、自己報告においては、一貫して不安が低い。しかし、行動においては、一貫して不安が高い。

(3) ambivalent得点が高いほど、自己報告においても、行動においても、分離中の不安が非常に高いが、分離前の不安は高くない。

## 方　法

### 参加者

東京都内の大学生に、自分にとって親しい人（恋人や友人）を連れて調査に参加することを口頭で依頼した。18名が参加を承諾した。参加者のうち９名が恋人を、９名が友人を親しい人として同行した。すなわち、合計36名（男性13名、女性23名）が研究に参加した。友人ペアについては、男性―女性のペアが２組、女性―女性のペアが６組、男性―男性のペアが１組であった。分析対象となった参加者は、男性１名、女性17名であった。参加者の平均年齢は、22.03歳（$SD=1.83$）であった。参加者の属性は、学生33名、その他３名であった。

### 手続き

本調査は、２つの段階からなる。第１段階は、実験場面の行動観察である。待合室での相互作用場面、及び、分離場面を観察した。第２段階では、質問紙への回答を求めた。

第１段階（行動観察）：参加者には、２人一緒に実験室に来てもらった。すべての参加者にとって、この実験室に来るのは初めてのことであった。参加者の不安を高めるため、実験

者は白衣を着て対応した。まず、実験のために必要な器具として２人の参加者にハートレートモニター（Polar社製Vantage XL Heart Rate Monitor）を装着してもらった。この器具は、胸部に直にベルトを巻き付け、腕につけた受信機で心拍数を測定するものである。器具をつけることで実験に対する不安を高めるためである。次に、別々の部屋で教示を行った。実験が大きな不安やストレスを生じるものであること、耐えられなくなったら中止可能であること、実験は１人ずつ行うことを伝えた。ランダムに選ばれた１人の参加者（以下参加者Ａ）には、先に実験を行うので、ベルの合図で待合室を出るように伝えた。この教示の目的は、実際にストレスや不安を感じるような実験を行うことなく、ストレスや不安を生じさせることである。教示が終了した後、２人の参加者は待合室に入り、５分間自由な相互作用を行った。５分後にベルを鳴らし、参加者Ａには、別の実験室で３分間簡単な計算課題を実施した。その間、もう１人の参加者（参加者Ｂ）は、１人で待合室で待っていた。課題終了後、参加者Ａに次の指示があるまで待合室に戻って待つように伝えた。参加者Ａが待合室に戻った後、５分後に実験者が部屋に入り、次のセッションに移った。この間に要した時間は、20分程度であった。待合室での参加者の行動は、天井に対角線上に備え付けられた２つのカメラで記録され後の分析に用いられた。

第２段階(質問紙調査)：実験が終了した後、２人に別々の部屋で質問紙に回答してもらった。

アタッチメントスタイルの測定　アタッチメントの個人差を測定するために、成人版愛着スタイル尺度（詫摩・戸田，1988）を用いた。この尺度は青年期以降のアタッチメントスタイルを測定する21項目（６件法）からなる。この尺度は、secureについて７項目、ambivalentについて７項目、avoidantについて７項目の３つの下位尺度から構成されている。各下位尺度の得点を合計した値を計算し、それぞれsecure得点、ambivalent得点、avoidant得点とした。

関係の親密さの測定　２人の関係がアタッチメント関係と言えるほどの親密なものであるかを調べるために、知り合ってからの期間、この関係の重要度（５件法。１．全く重要でない―５．非常に重要である）についてたずねた。その結果、参加者のすべてが、知り合ってからの期間が、３ケ月以上であった（$M$ = 28.51、*range* = 3-116)。また、関係の重要度については、すべての参加者が３以上の評価であった（$M$ = 4.72、*range* = 3-5）。これらの結果から、２人の関係がある程度以上の親密さにあると判断した。

不安の自己報告　実験中にどの程度不安を感じたかを自己報告してもらった。実験中の、ａ．教示直後、ｂ．分離前、ｃ．分離時においてどの程度不安に感じたかを５段階（0-4）

で自己報告してもらった。

デブリーフィング　すべての手続きが終了した後、参加者に対してこの実験の目的と手続きについて説明を行い、待合室で待っている間にビデオカメラで撮影されていたことを伝えた。参加者に実験において撮影が必要であった理由の説明を行い、このビデオテープを研究に用いることの許可を求めた。すべての参加者が、それに同意した。実験に関しての不安や問題がないかを確認した結果、問題を訴えた参加者はおらず、この時までに実験に関する不安は解消されていると思われた。また、後日この実験により何らかの不都合を生じた場合や、疑問などが生じた時に連絡可能なように、実験者の連絡先を渡した。実験に関して後日連絡してきた参加者はいなかった。

不安行動の評定

分離前、分離中の不安行動の程度を次のような基準で評定した。

分離前　分離前の、(a)服や体をさわる、(b)きょろきょろする、(c)体を揺する、(d)くすくす笑う、という行動を不安の指標として、５分間の生起回数をカウントした。

分離中　部屋をきょろきょろ見回す、ため息をつく、位置を変える、などの基準により不安の程度を５段階で評定した。具体的な評定基準は次の通りである。「何度もきょろきょろ見回し、閉眼したり下を向くこと、見回したり、位置を変えること、を繰り返す。」（５点）、「時々きょろきょろ見回し、閉眼したり下を向いては見回す。時々、位置を変えることもある。」（４点）、「目を閉じたり、下を向いたりすることが多い、きょろきょろ周りを見回すことがある。時々、ため息をついたり、体を揺すったりする。わずかに他の活動をすることもある。」（３点）、「目を開けていることが多いが、きょろきょろしたり、体を揺するといった行動を多く示さない。ため息をつくことがある。ほかの活動をしていることもある。」（２点）、「じっと落ち着いて、他の活動をしている。ため息や体を揺するといったことをしない。眠っていたりする。」（１点）。

## 結　果

青年期においては、恋人や友人のような親密な他者がアタッチメント対象となっているとされている。しかしながら、恋人と友人では、安全基地として機能する程度が完全に同等であることは検証されておらず、差異がみられる可能性がある。そこで、以下の分析においては、関係（恋人関係、友人関係）をダミー変数として統制して分析を行った。

自己報告と行動による不安の関連

各時期の不安の間にどの程度の関連があるのか、また不安の自己報告と不安行動の間にど

**Table 1　各場面の不安の自己報告および不安行動の間の偏相関係数（関係を統制）（N＝18）**

| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 自己報告 | 1 | 教示直後 | 1 | | | |
| | 2 | 分離前 | 0.64** | 1 | | |
| | 3 | 分離時 | 0.64** | 0.72** | 1 | |
| 行動 | 4 | 分離前 | 0.22 | 0.38 | 0.53* | 1 |
| | 5 | 分離中 | 0.42† | −0.11 | 0.30 | 0.08 |

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$

**Table 2　不安の自己報告および不安行動とアタッチメントスタイルとの偏相関係数（関係を統制）（N＝18）**

| | | secure | ambivalent | avoidant |
|---|---|---|---|---|
| 自己報告 | 教示直後 | −0.38 | 0.23 | 0.23 |
| | 分離前 | −0.32 | 0.01 | 0.16 |
| | 分離時 | −0.57* | 0.43† | 0.45† |
| 行動 | 分離前 | −0.23 | 0.17 | 0.48† |
| | 分離中 | −0.42† | 0.49* | 0.52* |

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$

の程度関連があるのかを調べるために、関係を統制した偏相関係数を算出した（Table 1）。不安の自己報告については各場面の間に高い正の相関があり、場面を通じて不安の高さが一貫していることがわかる。それに対して、行動による不安は、分離前と分離中の不安に相関がみられなかった。自己報告と行動の関連としては、自己報告による教示直後の不安と行動による分離中の不安との間に、また自己報告による分離時の不安と行動による分離前の不安との間に、それぞれ中程度の正の相関がみられた。また、分離前の自己報告と行動、分離時・分離中の自己報告と行動にはそれぞれ弱い正の相関がみられた。

アタッチメントスタイルと不安の自己報告

アタッチメントスタイルと、教示直後、分離前、分離時の自己報告による不安の程度との関連を調べるため、関係を統制した偏相関係数を求めた（Table 2 上段）。

secure得点と、分離時の不安との間に中程度の負の相関が、また教示直後、分離前の不安との間に弱い負の相関がみられた。ambivalent得点とavoidant得点については、分離時の不安との間に中程度の正の相関が、また教示直後の不安との間に弱い正の相関がそれぞれみられた。

アタッチメントスタイルと不安行動

アタッチメントスタイルと、分離前、分離中の不安行動の程度との関連を調べるために、関係を統制した偏相関係数を求めた（Table 2下段）。

secure得点と、分離中の不安行動との間に中程度の負の相関が、分離前の不安行動との間に弱い負の相関がそれぞれみられた。ambivalent得点と、分離中の不安行動の間に中程度の正の相関がみられた。avoidant得点と、分離前、分離中の不安行動との間にそれぞれ中程度の正の相関がみられた。

## 考　察

本研究は、自己報告によるアタッチメントスタイルが、パートナーとの相互作用場面、分離場面での不安の自己報告及び不安行動とどのように関連しているかを検討した。その結果、アタッチメントの個人差は、不安の自己報告、不安行動の表出と関連しており、それはパートナーの存在によって影響されていていることがわかった。

secure傾向が高いほど、自己報告においても行動においても不安は一貫して低かった。secure傾向の高い人は、パートナーが近くにいなくても、パートナーへの有効性に信頼感があり、自己の情動をうまく調整できる。そのため、パートナー不在時においても不安が高まることがなかったと考えられる。ambivalent傾向が高いほど、自己報告においても行動においてもパートナーとの分離において不安が高かった。パートナーが出ていってしまう時、パートナーがいないときには不安が高いが、パートナーが近くにいるときには不安が高くなかったのである。パートナーがそばにいるときはパートナーの存在によって不安が和らいでいるのであろう。しかし、パートナーの有効性に確信を持てないため、分離に際しては、不安が大きくなるものと思われる。avoidant傾向が高いほど、行動では一貫して不安が高く、自己報告では分離において不安が高かった。avoidantが高い人は、パートナーの有効性を信頼できないため、パートナーの存在によって不安が解消されないと考えられる。そのため、実験を通じて行動に不安が表出されていたのであろう。しかし、avoidantは、意識的には不安が低いと考えられているが、本研究では自己報告レベルでも不安が高かった。このことは、不安が完全に解消される前に、つまりデブリーフィングを受ける前に質問紙に回答したため、本来avoidantの者にみられる防衛が起こりにくかった可能性がある。あるいは、本研究のavoidantが、Bartholomewたち（Bartholomew & Horowitz, 1991；Bartholomew & Perlman, 1994）の指摘するfearfulタイプであった可能性がある。Bartholomewたちは、avoidantはdismissingとfearfulの2つのタイプにわけることができるとしている。dismissingは、乳幼児の

avoidantに対応し、他者に対する信頼感がないかわりに自己に対する信頼が高いため、不安が低いタイプである。それに対してfearfulは、他者に対しても自己に対しても信頼が低いため、最も不安が高いタイプである。本研究でavoidantがどのような特徴を持つものであるか、不安にどのように対処しているのかについては、今後検討していく必要があろう。

不安を感じる程度、さらに、不安に対する対処は、個人の持つアタッチメント表象である内的作業モデルに依存すると考えられる。ストレスや苦痛をともなうかもしれない実験や、パートナーが去っていってしまう状況を、どの程度危機であると感じるか、そしてその状況に対してどのように対処するかは、個人が自己や他者の有効性をどの程度信頼しているかによるのである。しかし、その一方で、アタッチメントは関係性の概念であり、相手との相互作用の側面を考慮に入れる必要がある。Kobak (1994) は、アタッチメントの関係性の側面に注目すべきであることを主張している。現在のアタッチメント研究の関心は、内的作業モデルとアタッチメントスタイルに集中しており、現在の相互作用のパターンが内的作業モデルに影響を与えているという可能性を無視している。すなわち、アタッチメント行動は、個人の内的な特性としての内的作業モデルだけでなく、現在の関係のあり方、つまりアタッチメント対象がいかにふるまうかによって、その現れ方は異なってくると考えられる。本研究についていえば、パートナーが実際にどのような働きかけや応答をしているのかによって、個人の不安は高まったり、解消されたりするであろう。さらに、そのようなパートナーの行動の蓄積が、個人の内的作業モデルを変化させる可能性を持っているのである。今後は、相互作用に注目して、どのような行動が不安を高めたり、解消したりしているのか、さらに内的作業モデルの変化の可能性について解明していく必要があろう。

## 引用文献

Ainsworth, M. D. S. 1967 *Infancy in Uganda: Infant care and the growth of love*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A Psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226–244.

Bartholomew, K., & Perlman, D. 1994 *Attachment processes in adulthood: Advances in personal relationships* (Vol. 5). London: Kingsley.

Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss: Vol*. 1. *Attachment*. New York: Basic Books. (黒田

実郎・大羽蓁・岡田佳子・黒田聖一訳『母子関係の理論Ⅰ　愛着行動』岩崎学術出版社 1976）

Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss : Vol*. 2. *Separation : Anxiety and anger*. New York: Basic Books.（黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳『母子関係の理論Ⅱ　分離不安』岩崎学術出版社　1977）

Bowlby, J. 1981 *Attachment and loss: Vol*. 3. *Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books.(黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳『母子関係の理論Ⅲ　愛情喪失』岩崎学術出版社　1981）

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press.

Collins, N.L., & Feeney, B. C. 2000 A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1053–1073.

Collins, N., & Read, S. J. 1990 Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 644–663.

Feeney, B. C., & Kirkpatrick, L. A. 1996 Effects of adult attachment and presence of romantic partners on physiological responses to stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 255–270.

Feeney, J. A., & Noller, P. 1990 Attachment styles as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 281–291.

Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511–524.

Hazan, C., & Shaver, P. 1990 Love and work: An attachment-theoretical perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 270–280.

Hazan, C., & Shaver, P. 1994 Attachment as an organizational framework for research on close relationships. *Psychological Inquiry*, **5**, 1–22.

Hazan, C., & Zeifman, D. 1994 Sex and psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships: Vol*. 5 *Attachment processes in adulthood*. London: Jessica Kingsley.

Jacobson, J. L., & Wille, D. E., 1986 The influence of attachment pattern on developmental

changes in peer interaction from the toddler to the preschool period. *Child Development*, **57**, 338–347.

Kobak, R. R. 1994 Adult attachment: A personality or relationship construct? *Psychological Inquiry*, **5**, 31–34

Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmacz, R. 1990 Attachment styles and fear of personal death: A case study of affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 273–280.

Mikulincer, M., & Nachshon, O. 1991 Attachment styles and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 321–331.

Simpson, J.A. 1990 Influence of attachment styles on romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 971–980.

Simpson, J. A., & Rholes, W. S. 1994 Stress and secure base relationships in adulthood. In K. Bartholomew & D. P. Pealman (Eds.), *Advances in personal relationships: Vol*. 5. *Adult attachment relationships*. London: Jessica Kingsley.

Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. 1992 Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 434–446.

Spangler, G., & Grossmann, K. E., 1993 Biobehavioral organization in securely and insecurely attached infants. *Child Development*, **64**, 1439–1450.

詫摩武俊・戸田弘二　1988「愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度の試み—」『東京都立大学人文学報』**196**, 1–16。

若尾良徳　2001「青年期のアタッチメント対象は誰か？～安全基地現象の観点から～」『東京都立大学心理学研究』**11**, 7–15。

若尾良徳　2004「青年のアタッチメントスタイルと不安喚起場面における行動との関連」『パーソナリティ研究』**2**, 47–58。

Waters, E., Wippman, J., & Sroufe, L. A. 1979 Attachment, positive affect, and competence in the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development*, **50**, 821–829.

## 注

(1) 本論文は、1999年度に学習院大学に提出された修士論文の一部を加筆、修正したものである。

(2) 本論文の作成にあたりご指導いただきました、元学習院大学教授の斎賀久敬先生、北海道医療

大学教授の近藤清美先生に感謝いたします。